平成９年９月25日

郷土あれこれ 第3号

発行　あきる野市教育委員会　東京都あきる野市二宮350　電話 0425-58-1111　FAX 0425-50-3451

考古学から見た網代の歴史

―― 東京都網代母子寮改修工事にともなう発掘調査の結果から ――

元東京都網代母子寮遺跡調査会調査員
宇佐美　哲也

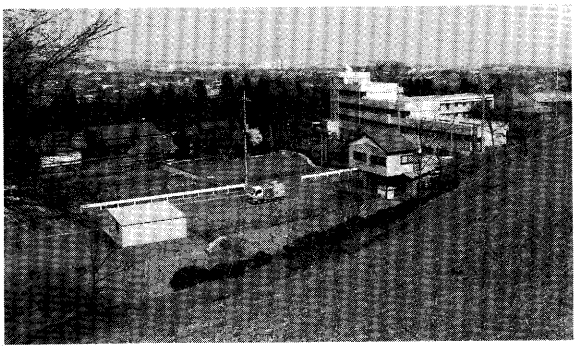
１．はじめに

現在、あきる野市内では、100ヶ所以上の遺跡が確認されています。その多くは、秋川流域の河岸段丘上（雨間、代継・富士見台など）や、平井川の下流域（草花、原小宮など）、多摩川西岸の秋留台地縁辺部（二宮神社周辺、前田耕地など）に位置しています。

そのなかで、秋川上・中流域に着目してみると、市西部の山間部や五日市盆地では、秋川の狭い河岸段丘上に多くの遺跡が位置しており、これまでに、乙津の宇佐岳や加茂原、留原、五日市高校などで発掘調査が行われてきました。また、伊奈・山田地区においては、秋川北岸の、山間部から秋留台地上へ移行する場所で、多くの遺跡が確認されており、伊奈の前原、水草木、日の出団地北側の岳の上などの遺跡が知られています。

今回紹介する網代門口遺跡は、秋川南岸の狭小な河岸段丘上に位置し、古くから縄文土器や古墳時代の土器などが拾える場所として知られてきました。網代門口地区の東寄りの場所にある東京都網代母子寮の建て替え工事にともなって、平成６年２月から発掘調査を行い、その後、出土した遺物の洗浄や接合・復元、実測などの作業を行い、今年３月に発掘調査報告書が完成しました。そこで今回は、網代門口遺跡における発掘調査の結果を、報告書を要約するかたちで紹介することにします。

発掘調査では、主に縄文時代、古墳時代後期、平安時代、江戸時代、明治時代以降の遺構・遺物が見つかっていることから、ここでは、これらの遺構・遺物を中心に、縄文時代から順を追って、周辺の状況についても若干の説明を加えながら記述していきたいと思います。



網代門口地区の現況（白い建物部分が発掘調査範囲）

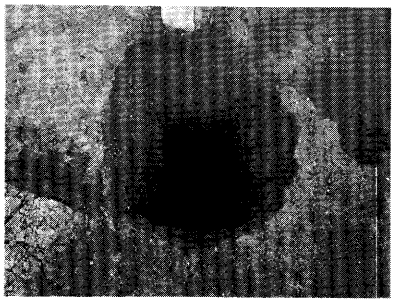
２．縄文時代の網代

今回の調査で見つかった遺構・遺物は、ともに縄文時代のものが大多数を占めています。なかでも、縄文時代早期（今から約7,000年前）のものと、中期（今から約4,000年前）のものとに大きく分かれます。

早期の遺構としては、炉穴が２基と、土坑（土を掘りくぼめた穴）が８基見つかりました。

炉穴とは、楕円形の掘り込みの一端の底面が熱を受け赤化した状態で見つかる遺構です。これは、炉の跡と考えられています。縄文時代早期には、まだ竪穴住居の内部に炉が作られておらず、住居とは別の場所に、炉だけを作り、土器を使っての煮炊きなどを行っていたと考えられています。

また、８基見つかった土坑のうち、いくつかは長径が１メートルほどの大きさ、形は楕円形で、深さが１メートル近いような、きわめて深い穴で、シカやイノシシなどの動物の通り道に、獲物を捕るための陥し穴として掘



縄文時代早期の陥し穴

られたものと考えられます。

縄文時代早期の陥し穴は、同じ網代地区のなかでも山寄りである南側の引谷ヶ谷戸でも、数多く確認されていることから、秋川南岸の山間部一帯は、縄文時代早期には多数の陥し穴がいたるところに掘られ、広く狩猟の場として利用されていたようです。

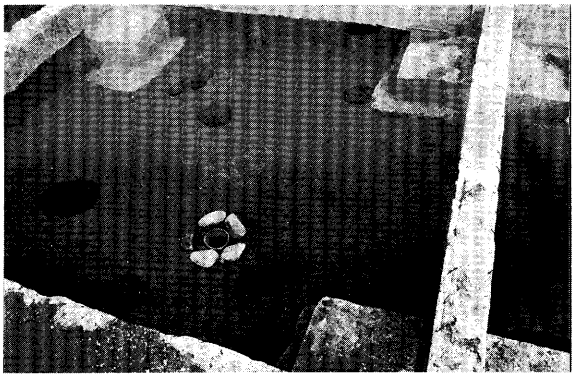
また、炉穴については、秋川のやや上流に位置する留原においても見つかっており、網代門口や留原などのように平坦な場所は、腰を落ち着けて煮炊きなどをする場所としても利用されていたのでしょう。

つぎに、縄文時代中期について見てみると、主な遺構としては、竪穴住居が16軒、集石土坑４基、単独埋甕１基、焼土跡２ヶ所、遺物集中３ヶ所などが見つかっています。

竪穴住居とは、直径５メートルほどの大きさで地面を円形に掘りくぼめ、その中心に石や土器などで囲った炉を作り、まわりに柱を立てて作った住居の跡です。そこに木、茅、葦などを利用して円錐形の上屋を建てたものと考えられています。

発掘調査では、この竪穴住居の掘り込みを埋めている土（覆土）を丁寧に掘り下げていくのですが、その際に、大量の土器の破片や、石器、割れた石、熱を受けて赤化した石などが出土します。これら多量の遺物を含んだ覆土を掘り上げると、ようやく住居の床面が確認できるわけです。

ところで、竪穴住居の覆土から多量に出土する土器や石器などの遺物のほとんどは、その住居で使われていた物がそのままそこに残されているわけではないようです。土器や石器の多くは、住居の住人がどこかへ移動し、廃墟となった住居の竪穴が埋まりかけたところへ、まわりから廃棄されたものと考えられています。おそらく、ある時期ごとに移動してきた人間が、自分の住居を掘るまわりに残されていた、先人たちの埋まりかかった住居の跡を埋めたり、あるいは、まわりに散らかっている壊れた土器や石器を片付けて埋めたのかもしれません。



縄文時代中期の竪穴住居（上：中央手前が炉小さな穴は柱穴）と遺物の出土状態（左）

それはともかくとして、ほとんどの住居からは、大量の土器や石器などが出土しますが、壊れずに完全な形で見つかるものは、ほとんどまれであることも、これら出土遺物のほとんどが、使われなくなったゴミであることを良く示しています。

また、今回の調査では合計16軒の住居が見つかりましたが、これらのすべてが同時期に建っていたわけではありません。

まだ文字などが無かった縄文時代などの調査では、出土したものの年代を直接知ることができるわけではありません。そこで考古学では、主に土器に付けられた文様の変化を順番に推測しながら並べることによって、時間の物差し（土器編年）を作っていますが、それぞれの住居から出てくる土器を、この物差しの上に並べることによりはじめて、それぞれの住居の前後関係を知ることができるようになります。

今回見つかった16軒の住居を、この物差し上に並べると、同時に建っていた住居は１軒か２軒ということになります。

縄文時代中期と一言で言っても、実は1,000年ぐらいの時間幅があります。たとえ、中期の住居がたくさん見つかったからといっても、何十軒もの竪穴住居が、軒を連ねるように建っていたということは決してありません。

むしろ、１軒とか２軒とかいった小さな集団が、何回も同じ場所に繰り返し、生活をした結果であるのです。

ここ網代の地も、縄文時代の人々にとっては、とても生活しやすい場所だったのでしょう。中期のあいだに何回も繰り返し繰り返し、住居が作られたようです。

竪穴住居のほかには、集石土坑といって、真っ赤に焼けて割れた石が多量に詰め込まれた穴や、埋甕、土坑などが見つかりました。集石土坑とは、当時の人々が、肉や魚などを蒸し焼きにするための施設だと考えられています。竪穴住居のまわりには、このような様々な施設が作られていました。

縄文時代中期の集石土坑（焼けたり、割れた石が大量に詰め込まれている）

縄文時代の遺物としては、まず大量の土器があります。縄文土器には、縄や棒の先端などを使ったり、表面に粘土を貼り付けたりして様々な文様が付けられます。時には、実際に使えるのかどうか疑わしいほどまでに飾られた把手（とって）が付けられたものもあります。このように文様は様々なのですが、器の形としては深鉢（ふかばち）が大半で、ほかに浅鉢（あさばち）などが認められるだけです。

土器のほかには、石鏃（せきぞく）（やじり）、打製石斧（だせいせきふ）（土を掘り起こすなどのための道具）や、磨製石斧（ませい）（木などを切るための道具）、磨石（すりいし）・石皿（木の実などを磨り潰して粉にする道具）、石匙（せっぴ）（皮剥ぎなどナイフのような道具）などの石器がたくさん見つかっているほか、土偶（どぐう）（土製の人形）２点や琥珀製垂飾品（こはくせいすいしょくひん）１点などが見つかっています。

琥珀製垂飾品は、径７センチメートルほどの琥珀に、丁寧に穴を開けペンダントにしたもので、ほぼ完全なかたちで見つかりました。琥珀自体が非常にもろいことから、琥珀製品が完全なかたちで見つかるのは、非常に珍しいことと言えます。

それにくわえて、琥珀はどこにでもあるものではなく、産地として現在までに知られている場所は、北海道石狩地方、岩手県久慈市、福島県いわき市、千葉県銚子市、岐阜県瑞浪（みずなみ）市など、日本全国の中でも数ヶ所でしか採取できない珍しいものなのです。

琥珀製品が出土したここ網代からこれら産地のうち、もっとも近い銚子や瑞浪でさえも150キロメートル以上離れています。このことから、縄文時代においては、現代の人々が考える以上に、広い範囲で活発な交流がなされていたものと考えられます。

３．古代の網代

調査では、古墳時代後期（今から約1,300年前）の竪穴住居２軒と、平安時代（今から約1,000年前）の竪穴住居１軒、円形の土坑10基が見つかりました。

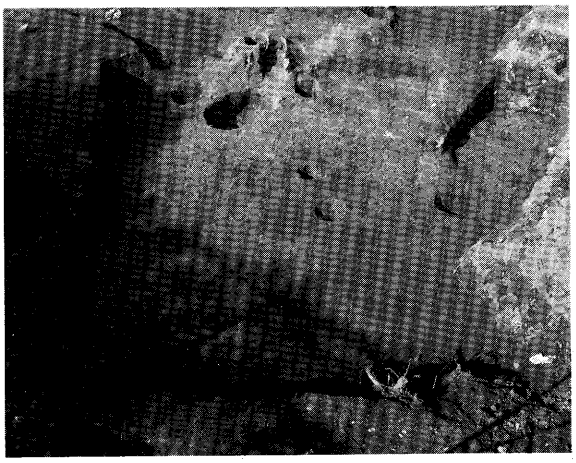
古墳時代後期の竪穴住居は、前に記した縄文時代の竪穴住居とは異なって、一辺が５メートル前後の四角形となります。また、もっとも大きな違いは、これまで、住居のほぼ中心に炉が作られていたのに対して、壁ぎわにカマドが作られるようになることです。

カマドには大きな甕（かめ）がかけられたり、甕の上には甑（こしき）（底に穴が開けられていて水蒸気が通るようになっている蒸し器）がかけられたりしていたのでしょう。カマドは主に、調理の場として利用されました。

土器も縄文時代の土器とは、まったく異なります。縄文土器には、様々な文様が付けられていましたが、古代の土器には文様などはまったく付けられず、実用の器としての側面が強くなっています。この頃の土器には、おもに甕、甑のほか、椀（わん）や坏（つき）（小形の皿のようなもの）などの形が認められます。

円形の土坑は、おそらく当時の農作業にともなって掘られた穴だと言われていますが、詳しいことはよくわかりません。

このような古代のムラの跡は、網代門口だけではなく、



古墳時代後期の竪穴住居（奥壁の中央がカマド）

東側に隣接する坪松でも見つかっていることから、当時の人々は、秋川南岸の狭い平坦面上にも、点々と生活していた様子がうかがえます。また、最近では、日の出町の三吉野地区でも、同時期の遺跡が調査されており、秋川や平井川の流域は、古墳時代以降、活発に土地開発が進められていたようです。

4．江戸時代の網代村

調査では、掘立柱（ほったてばしら）建物（地面に穴を掘り、柱を建てた建物）２棟と、畑作の痕跡と考えられる溝状の遺構が見つかり、そこから17世紀後半から18世紀前半代の陶磁器の破片が出土しています。今回掘立柱建物が見つかった場所は、網代村の世襲名主家（江戸時代の村役人である名主職を一家で代々世襲する家）や、禅昌寺というお寺に近接する場所であることから、当時の一般的な建物であったかどうかは分かりません。

江戸時代の網代村は、戸数二十数戸の小村として記録されています（『新編武蔵風土記稿』）が、農業以外にも、筏の川下げや林業などで生計を立てていました。今回見つかった建物跡も、そのような人々の生活痕跡の一部であることには間違いなさそうです。

5．明治時代以降の網代村

大正14（1925）年に、今のＪＲ五日市線の前身である五日市鉄道が開業した際に、観光客を誘致するために高尾の梅林、網代の鉱泉などとともに、この網代門口の地に「網代旅館」が開業したと言われています。

今回の発掘調査では、拳大から人頭大ほどまでの丸い石を帯状に敷き詰めた遺構が確認されました。ここに敷き詰められた石のほとんどには、人為的に割られたり、熱を受けて赤く変色したような跡は見られず、どちらかというと拾ってきた石をそのまま平らに敷き詰めたような感じでした。また、石と石の間からは、昭和前半期の陶磁器の破片や、ガラス瓶の破片などが出土していることから、道路の跡か、もしくは旅館の開業にともなって、玄関回りなどを整備した時の石敷きの一部とも考えられます。また、昔の建物配置図と対応することによって、旅館当時の炊事場と井戸の痕跡も確認できています。

この「網代旅館」は第二次世界大戦中には、立川の昭和飛行機の修練所として利用され、さらに戦後間もない時期に母子寮として利用されはじめ、現在にいたっているわけです。

江戸時代の掘立柱建物（上：白丸で囲った穴が建物跡、手前の溝は耕作痕）と、近代の敷石状遺溝（右）

6．おわりに

以上、紹介したとおり、今回の発掘調査では、秋川南岸の北向きの小段丘面上に、縄文時代早期から中期、古墳時代後期、平安時代、江戸時代、明治時代以降と様々な時代の、様々な生活の痕跡が調査できました。

同じ網代でも、前述したような坪松地区や引谷ヶ谷戸地区での調査や、西に隣接する高尾での調査、かつての留原での調査成果などを参考にすると、秋川南岸の山よりの場所でも、縄文時代以来、活発な土地利用がなされてきたことが、次第に分かってきました。

現在、あきる野市内では、６ヶ所で発掘調査や整理作業が進められています。秋川南岸のみではなく、秋留台地上にも、かつての人々の生活痕跡はより広く展開しているものと考えられることから、これらの発掘調査の成果によって、市域の歴史像はより豊かなものになっていくことは間違いないでしょう。

……

網代母子寮遺跡調査の発掘出土遺物等の展示会を五日市郷土館で12月21日(日)まで開催しています。